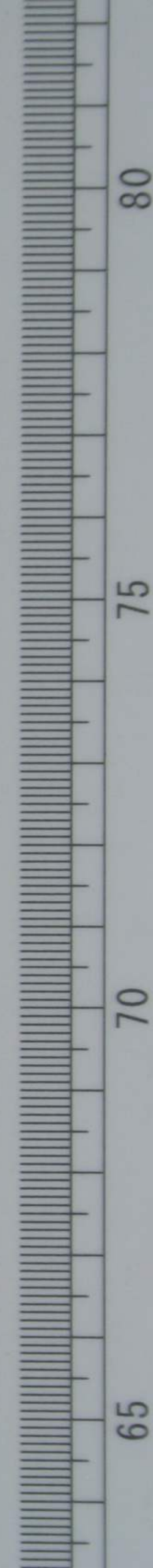
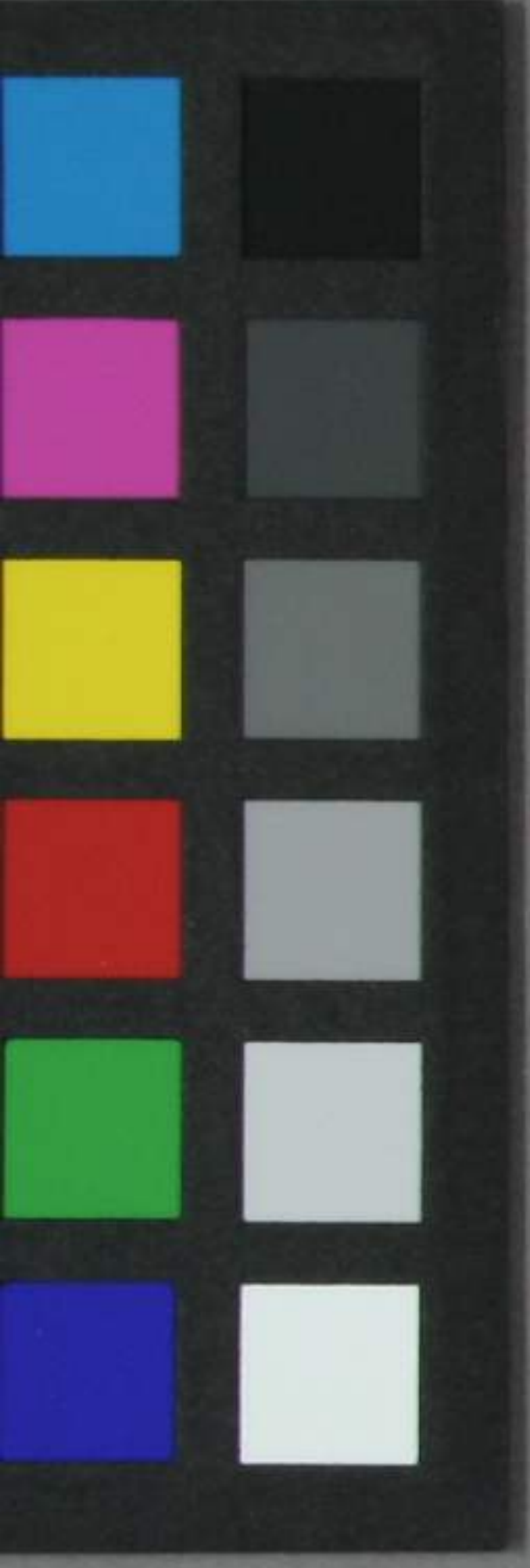


詩集
榭之葉

與謝野寬作





詩集
榭之葉

與謝野
寬作

行刊館文博



詩集
榭之葉

與謝野寬作

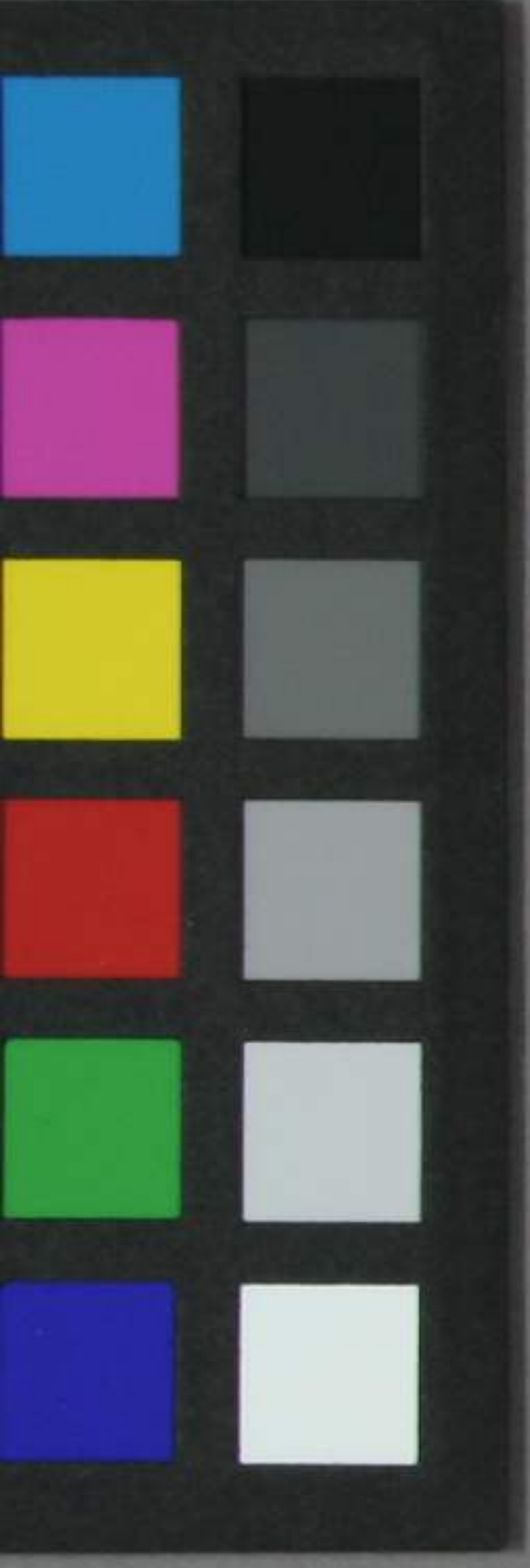


詩集
榭之葉

與謝野寬作

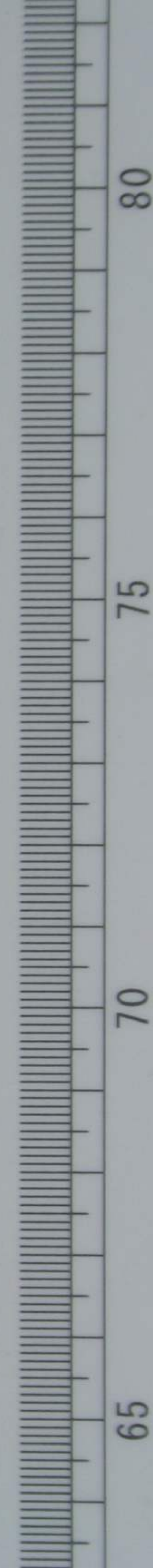
行刊館文博





櫛之葉

與謝野寬作





榭之葉

與謝野寬作

行刊編文博





櫛
之
葉

與謝野
寬著

森林太郎先生に獻す。

明治三十五年以後、最近に到る、
八年間の製作より、小曲百六十
篇、長詩四十二篇、短歌五十首を
揃ひて、この一巻をなせり。

著者。

解之葉目次

| | |
|--------|---------|
| 小曲百六十篇 | ： 一—一六〇 |
| 森 | ： 一六一 |
| まくは瓜 | ： 一六四 |
| 筭 | ： 一六七 |
| 彗星 | ： 一七二 |
| 斧 | ： 一七五 |
| 傘 | ： 一八〇 |
| 海の怪 | ： 一八三 |
| 戀しくば | ： 一八六 |
| 車 | ： 一八八 |
| 花がちる | ： 一九一 |
| 琴 | ： 一九六 |
| 樟の樹 | ： 一九九 |
| 海の中道 | ： 二〇四 |
| お才 | ： 二〇九 |

| | |
|-------|-------|
| 殻 | ： 二一一 |
| 君 | ： 二一五 |
| 旅か寝 | ： 二一七 |
| 木かげ | ： 二一九 |
| 法樂の夜 | ： 二二二 |
| 伏見の翁 | ： 二二二 |
| 箱館屋 | ： 二二二 |
| 仁作 | ： 二二六 |
| 黍 | ： 二四〇 |
| そよかぜ | ： 二四三 |
| 病室 | ： 二四六 |
| 砂ぼこり | ： 二五〇 |
| 許きあひ嫁 | ： 二五三 |
| ゆきあひ | ： 二五五 |
| 蜂 | ： 二五九 |
| 淨き火 | ： 二六〇 |
| 刹那 | ： 二六四 |
| | ： 二六九 |

流星

「素足すあしに走わしるながれ星ほし、

ああわが女をみななにか然さは

空そらのあなたへ行き隠かくる。』

「答こたへぬも憂うれし。ひと筋の

わかき白しろ髪がを羞はづるとて。』

燕

「柳のうへのつばくらめ、
何をか語る。」「南國の
赤土の路のゆきかへり、
落ちたるままに見て過ぎし
水いろの紗の面帕を。」

消 息

「君戀ふ」とつと走り書き、
墨吸はぬすひとり紙を
はらだちて二つに裂きぬ。
門の前人行きさわぎ、
星亨刺さると云ふ日。

妻

『日に絞めん、千人の頭。』

『千五百人さらば生はん。』

さかんなる神の言葉に

足らはぬをわれいで添へん。

『人ごとに妻を興へん。』

許 嫁

口重き性とのみかは。

われ足らふ。何を申さん。

父母よ、師よ、はらからよ、

ただ恐る。三とせの後の

わが妻の足をつめたさ。

大音

馬上より、蛇へびの鞭振り、
一揖いちいぶし、さて大音だおんに、

「反側うらぎりの子は城出でぬ。

誰たれを射るや。」皆額叩みなかたたく。

「大王だいおうよ、いざ従はん。」

夕飯

卓しやくのうへ、葡萄酒の饌げん、

豚の皿、くだもの並ぶ。

はれやかに君ものを云ひ、

飲み干ほして我も答こたへつ。

さて、なせか、まづき夕飯ゆふめし。

如 是

汝泣く。目やむづ癢き。

彼怒る。火や髪焦す。

われ笑ふ。身筋たゆめば。

物皆はあるべき棚に。

青蠅は馬の尻尾に。

貴 人

われ歎く。かの貴人を。

かの君は名なし。錢なし、

ひもじやと常に慄へぬ。

さはれ、また、食はで永らふ

術知るも飢ゑし貴人。

相手

鼻赤み、方なる面、

口太く下に曲りぬ。

唐棧の酒染む裕、

ふところ手。静かに言ひぬ。

『骨牌切らん。有りや、資金は。』

おとどひ

その母は三味弾き遊ぶ。

あはれなり、姉といもうと。

目脂ため、夜も安く寝ず、

鐵針に赤き頬寄せて

靴を縫ふ。海の士官の。

鯉 幟

どろを運ぶと、どろ河の
どろの中なかゆくどろ船に、
赤くなびける鯉のぼり。
その兒こ祝はん。どろ河の
どろに映うつれる鯉のぼり。

留 作

留とま作は伯父を殺しき。
その若き妻つまを得んとて。
さはれ、今、見み恍ぼけて立ちぬ。
しづかなる冬ふゆの木間こまに
赤く染むおのが掌てのひら。

詩 人

歌びとよ、我等ただ見る。
片はしの物の争ひ。
かのすべて睦べるさまは
君ひとり妙しくも知れる。
この故に君に食はせん。

(一四)

市役所

そこ守る小倉の服の
老僕は猛に叱りぬ。
大王の衛士のたかぶり。
あな寒し。曲りて登る
市役所の石の長廊。

(一五)

影

薄暗き影きて泣きぬ。
玉手さし寝ねぬる床に、
朝ゆく市の大路に、
懺悔する御堂の中に。
さては知る。明日の墓まで。

新兵

新兵のたまはる銭は
日に四錢。酒保の片かけ、
泣きて食ふ。堅麵包一つ。
さて啜る。温湯を二杯。
生疵は母に文せじ。

らんぶ屋

萬人のかよふ大路に、
らんぶ屋はあやふき寶
硝子積み、車を曳きぬ。
彼は知る。その荷の幸を。
行く方に待てる得意を。

夏 日

鶏は庭に砂浴び、
犬どもは喘ぎて、共に
背にわける虱を噛みぬ。
油日は撒きぬ。一めん、
疫病の發疹の斑。

人妻

『人妻をいかで思はん。』

この楯にかけて誓はん。』

大理石の裁判の庭に

『否』と君われを見上げぬ。

この時にとよむ大地震。

病室

われは大熱、大床に

唯ひた呻く。向ひには、

何禁厭ふや、またしても

静かに目閉ぢ指折りぬ。

脊骨腐れし豫備少尉。

敵

わが敵、いしく物言ふ。
譽とし、さては祝はん。
汝が眼に猶われあるを。
願くは千とせの競技の
桂巻く班にまた見ん。

われ常に

われ常に高きを渡り、
向股に蹴るはららかす、
八つの雷、十二の旋風。
人に投ぐ、若き茜の
霞たつ海の日の出を。

大寺

大寺の丹塗の柱、
濡色の黒髪の鳥
つばくらめ巢咋ひ飛交ふ。
その下に翡翠の念珠、
黄なる袈裟、わかき尼達。

(二四)

舞ぎぬ

われは愛づ、襪の心を。
紫と赤となよめく
舞ぎぬの襪の心を。
襪なくばやがて舞なし、
君えらべ、寛き舞衣。

(二五)

十字架

われは上らじ、十字架に。
すべての不慧の人を驅り
よしや上すも、十字架に。
負けたる者の泣きて立つ
櫛の荒木の十字架に。

人生

硝子磨る。夜晝すがらに。
硝子磨る。磨れば聞きよし。
愛欲のしづく、智慧の
金剛砂きしむ響も。
硝子磨る。夜晝すがらに。

蠅

腐れたる溝に伊群れて、
青き蠅大関つくる。
『かの大蛇、焼けたる沙に
時疫病み、呻びのたうつ。
天の時われらに来る。』

櫓の上

大氷原の傾斜面、
寛き緋羅紗の上衣きて、
空色ぎぬの君いだき、
わが乗る櫓は朝風に
碎けて死ねと驀然に。

倦 怠

すべて興なし、すべて憂し。

黄金の輪の馬車の上

大擲彈は裂けしかど。

年頃めでし舞姫の

眞白き指を皆切れど。

春はきぬ

隣の垣のあをやなぎ、

隣の軒のつばくらめ、

春こそ來ぬれ、隣まで。

痩せて稜ある頤を

白き兩手に搔い支ふ。

殘 虐

われはすべてを凌辱す。
踏みにじらんと、鐵底の
重たき靴をあつらへぬ。
われ殘虐をおこなはん、
刺ある枝を杖に伐る。

宿

時にひと夜の宿を假る。
眞黒き蛇が枝ごとに
ぬめらぬめらと下りたる
硫黄の洞の媼の家、
妖薬を鍊る爐のほとり。

孤 獨

われに添ひぬるわが影も
われにはあらず、わが口を
出でにし歌も歸りこず。
あはれ、あはれ、
まして彼の神。

(三四)

赤 色

疱瘡神を威さんと、
符を切り赤く染めつるは、
百五十度の竈の熱
前なる黒きまどろすの
頬の火傷を照す色。

(三五)

でまかせ

(三六)

黒き毛の小狗となりて。

清盛の法衣となりて。

HASHUSHUの魔薬となりて。

NAPOLFEON一世となりて。

BATAVIAの脚氣となりて。

友

酒瓶は倒れて赤し。

かの隅に女人の髑髏

琴ひけば、うしろの扉より

VERLAINE 青ざめ覗く。

のけぞりて友は眠れり。

(三七)

他の友

荒木の杖に蛇を彫り、
女の噂たかく爲て、
酒にむかへば、わかき友、
楯の上より傷負ひて
笑ふが如き歌哀し。

蛾

金の繭、しら玉の繭、
まゆごもるちきき少女等
蠶の蛾、繭より出でつ。
ここにあめして天のふるまひ、
しらしらと曳きぬ。舞衣。

谷

歸らまし。霜ふる谷へ。
通草^{あひび}の果^みはた、その蔓^{つる}も
紫に染^そみてかをらん。
歸らまし。その蔭にこそ
我等が巢^{うら}、蜜^{みつ}の巢はあれ。

(四〇)

百合

あはれ清らに眞白なる
君が手に似る百合の花。
みぎはに遊ぶわが夢の
うすむらさきの霧のむれ、
しづくとなりてつと結^{むす}ぶ。

(四一)

表象

わが大王は旗矛を、
わが手弱女はますら男を、
わが歌びとは桂樹を
表象とぞする。常人の
我はわれなる肉の身を。

蛙

水草けふる古沼の
夜あけに蛙ひとつ啼く。
思ふは市の樂堂に
大理石の階くくと踏む
むらさき紐の織き靴。

颯 風

嵐ぞきたる。嵐、嵐。

海よりきたる。嵐、嵐。

あけぼの色の絶壁に

白帆の如き大鳥の

翼を送る。嵐、嵐。

床

あめつちは餘りに濶し、

さればこそ行く方知らね。

たをやめの香る小床は

やはらかに狭し、をぐらし、

この故にわれを横たふ。

一 夜

(四六)

祇園の櫻ちりがたに
ひと夜の君は黒腫がち、
上目するとき身にしみき。
そは忘れてもあるべかり、
若き愁のさはなるに。

女 いふ

女云ふ。(肩に手かけつ。)

「誰ゆるぞ、父母にさへ
憎まれてわび寢をするは。」

(上目して唇寄せつ。)

またも云ふ。「抱きて逃れよ。」

(四七)

我

少女七たり、その肌は
ころも透りて光りたり。
星の如くに舞ひ繞り
星の如くに歌ふ時、
天つ日の如われありぬ。

夢

夢の一つは斯くなりき。
かなかなと、かなかなの蟬、
かなかなと、かなかなの蟬、
木毎に啼くをよく聽けば
皆わが母の聲なりき。

乳 母

わが乳母は八瀬の牛飼、
飼葉たく末なる娘。

母の手の赤き林檎も

何ならん。わが好きけるは

その甘き、黒き黒き乳。

あだびと

あだびとは遠く去りにき。

岡の木にわれを繋ぎて、

わが馬を七つ奪ひて、

わが妻を馬に上せて、

わが角の笛を鳴して。

夢

夢の一つは斯くなりき。
あだびと來りわが妻を
奪ひて去りぬ。われひとり
手枷せられてさまよへば
綠青色の海見えき。

(五二)

呵責

天つ日となり、角はえて
野原を走る犀となり、
山には長き蛇となり、
海には鱧の口となり、
わが後よりひた追ひぬ。

(五三)

おひたち

わが育ち少し飽かぬは、
馬の乳に初湯つかはず、
馬の乳を飲みて育たず、
蒙古字読みも習はず、
いひなづけ親の定めず。

(五四)

飢 渴

繩の帶、ちやいろの單衣、
素足して、頬の痣黒き
その男またも來りぬ。

『大橋の下に住へり、
錢たまへ、物を食はまし。』

(五五)

草

かの^{たましい}靈をわかたんと
のたまひしかば、目覺めつつ、
草は初めて身を知りぬ。
われならぬ世のうるはしさ、
すべてねたまし、羨し。

(五六)

夢
とき

京の夢、大阪の夢、
夢^{ゆめ}解^{とき}の身はおもしろし。
人の哀^{かな}しき、なつかしき、
いみじき夢のさまざまを
わが夢として夢みつつ。

(五七)

異端

われの下部は、PROTEUS、
MEDUSAの蟒蛇、喇嘛教の
齋く淫れのことひ牛。
ただ、妖薬の爐のほとり
かの媼こそ老いにけれ。

(五八)

蝶

紅き蝶きてささやくは、
『夢多くあこがれ追ひし
かの少女いまは目ざめぬ。
使せしわれの羽袖を
たゆき目に見もおこせつつ。』

(五九)

死

はた、はた、はた、と力なく
しめれる音はたゆたひぬ。
踵切れたる藁草履。
五百重に積める骸骨の
切崖に来て路も無し。

毒葡萄

もとむるところ多ければ、
野にきて摘みぬ。そを吸へば
ややに細りて死ぬと云ふ
黒血の色のどくぶだう。
さて、今日の日もなぐさみぬ。

自叙

孤兒みなしごなれば逐はれにき。
日のさす下もとも暗ければ
土鼠もぐらの如くさまよひき。
かくのみ告げて、大王だいおうの
落胤おとしだんとは言はざらん。

(六二)

酒ほがひ

庭燎にほたき夜どほし遊ぶ。
赤き花つみつつ遊ぶ。
酒壺さかづきをめぐりて遊ぶ。
酔ひあざれ手とりて遊ぶ。
音頭おんどとり歌ひて遊ぶ。

(六三)

明日

百千の花を摘みためて
香るなかにや室せ死なん。
さらずば若き人の妻
偷みし罪にくろがねの
錨を抱きて沈ままし。

(六四)

頽廢

三十路の男しをたれて
眞黒き家に歸りきぬ。
わかき少女のくちづけの
名残もあらぬ唇の
色褪せたるを歪めつつ。

(六五)

禿頭

あだびとの火に追はれつつ
せうことなさに隠れたる
洞の上をば火は過ぎて、
頭をすこし焼きたれば、
見かけの如き禿となる。

(六六)

母

あな鬮、母の足音す。
母はつつめど、姪みたる
様子は著し。あさましく
我等を見れば罵りぬ。
こたびの父は誰ならん。

(六七)

少女

手をさしのべで上目せよ。
偽るなかれ。汝が最も
讀まんとするは、語學の書、
宗門しゅうもんのふみ、それよりも
わかき男の目ならまし。

(六八)

おくり物

また MEPHISTO の贈り物
黄金こがねの箱は効ありぬ。
むかしの如く美しく、
賢かしこさは猶いやまさる
今の少女を賺すかすにも。

(六九)

我は賭く

(七〇)

おもしろき采さいの目出めいでよ。
われは賭かく。かの子この名もて。
川かひがし祇園ぎんの小屋こやに
舞まふ時は牡丹ぼたんに似にたる
うらわかをみなかき女をわざをぎ。

飯粒

飯粒めづつぶぞ初湯うづゆつかへる。
飯粒めづつぶぞ王冠わうくわんしたる。
飯粒めづつぶぞカントカントを説とける。
飯粒めづつぶぞ互たがひに吸すへる。
飯粒めづつぶぞ黒くろき夢ゆめ見る。

(七一)

撥 無

(七二)

生くる、苦む、さて死ぬる。
この古臭き段取を
猶まもるこそ愚なれ。
われは逆に行かん、
先づひとり死なん。

行く春

(七三)

ほろほろとさくら散る。
水のほとりを行くをみな
襟あし白し。うなだれて。
ほろほろとさくら散る。
黄昏の隅田堤の哀しさよ。

信 條

國のためには無籍者、
人のためには親無兒。
何かあらん、何かあらん。
だいなまいとと、赤き旗、
斷頭臺と、この外に。

(七四)

主 人

旦那は禿だ、禿だ。
新參の小僧は氣になつてならぬ。
七日も八日も禿を思ッてる。
旦那は知らない、
旦那はよく叱る。

(七五)

病院

(七六)

黄の、青の、赤の
雨が降る、降る。小雨が。
芝生の上をすぢかひに
空仰ぎ歌うて走る。
脛しろき女狂人。

女よ

『忘れて下さいな。』
なせ、そんなことを言ふ。
おれは貴様に縛られて
足搔がつかないぢやないか。
忘れるにはだいぶ手が掛る。

(七七)

妻

破れし黒き靴したを
ねむたき目して綴りさし、
蚤のせせれる己が背を
心ゆくまで搔き下げぬ。
あはれ、あはれ、古き妻かな。

磯

なにごとの磯にありけん。
大いなる足跡あまた
踏み亂し砂につづけり。
しづかなる青き波には
しら鳥ぞ死にて浮べる。

寛容

すこし摯實を我缺かん。
さらずば、彼等つかのまも
我に近づく機会無けん。
我をあざける種無けん。
これを上なき幸として。

沈没

船が歸らぬ。大船が。
戦は勝ちときまれども、
船が歸らぬ。大船が。
旅順の沖の青海に
壹萬人は潮浸り。

時雨

時雨ふる日はおもひいづ。
當麻の里の染寺に
ひともと枯れし柳の木。
京の禁裡の廣前に
ぬれて踏みける銀杏の葉。

水

ちよろ、ちよろ、と山の下水、
百合さける茂みをつたひ、
切崖の下に流れぬ。
つと、夕、きたりて濁す。
赤馬の前足の爪。

霏

霏みぞれふる日の路の邊に
倒れかかりぬ。墳墓おぼけの
白木しろきの卒都婆そとばあはれ、今
われも霏みぞれに倒れなん。
七日なな食かはずおとろへぬ。

友

酔よひたる群むらは川に來て、
一人ひとりの酔へるその友を
橋の上より棄て去りぬ。
『彼奴かやつあまりに酔ひ過ぎて
酒の作法さを亂せば』と。

囃

少女等ぞしのびに云へる。

かの君の頬に髭なくば、

かの君の蕪を嚙まずば、

かの君の賭場に入らずば、

MANDOLIN 弾くのみならば。

窓

しろき指格子にありと、

わが見しは唯そればかり。

なつかしき街の曲り目、

今日もまた見てこそ過ぐれ。

その黒き櫛形の窓。

猫

明き燭のもと、居酒屋の
ていふるごしにかき抱き、
ひしと俄かに吸ひたれば、
つと、黒猫はかけ上り
かたへの棚に尾を立てぬ。

(八八)

肥えたる女

世界の男みな疲れ、
葦の如くに痩せほそり、
風の如くに呻き臥し、
肥えたる女家ごとに
薬調ずる世は来る。

(八九)

碑 銘

七歳にて琴弾き覚え、
十二にて歌書きちらし、
十五にて京の俳優、
二十にて君に思はれ、
その文月十日みまかる。

兄の思へる

「兄あに姫よめをわれは姦をかしき。
また焼やけり。兄の馬屋うまやを。」
弟あとうとはおどろくべかり。
おちつきて、裁判さばきの庭にに
この嘘うそを泣なきて語かたれる。

乗客

古き仇かたきにあらねども
ともに噛まずば生き難し。
然しか思ふらん。險けはしくも
稜かどある目もて見かはしぬ。
束つかの間ま乗れる電車でんしゃにも。

(九二)

まろうど

この耻知らぬ客人まろよ、
再びきたること勿れ。
四十しじよを越せる人妻ひとづまも、
十五ばかりの小女こをんなも、
おなじ品しなにぞあげつらふ。

(九三)

犬

うかと開けたる
戸の陰から、
あら、白い犬になつて
逃げた、逃げた。
こんちきしやう。

(九四)

お艶さん

お艶さんが泣かはる。
ひよんな時に。
泣かはる。
綿帽子きて、襦とツて、
出がけに。

(九五)

鴉

鴉からす、鴉からす

狡猾かつな鴉、

さわぐ鴉、

からるばりの鴉、

木を枯からす鴉。

しづく

大寺の高き檐のきより

朝の霜とけて雫しづくす。

山あひの馬車の宿場しゆくばに

衣濡ぬれし秋の日の如ごと、

ふとなりぬ。旅のこことに。

歌

こちとらが
ちやくと目で云うた事を
歌で返しやる。
とろくさい。
口を吸はしやれ。

密 會

あれ、怖^{こは}や。
閨の戸の錠^{ぢやう}の目が
『みそか男をよう入れた。
寢^ねささぬ』ときと睨^{にら}む。
君は『寢よ』と言ふ。

夜

ひと聲黒く、臨終の
寒き唸り。夜は二時すぎ。
一等室の患者ならん。
解剖室の窓より
白き猫跳り出でぬ。

(100)

爪

馬の爪、猫の爪、牛の爪、
爪こそはすべて無残なれ。
鷲の、猿の、鸚鵡の爪、
さては少女の紅させる爪、
山の修験の白く長き爪。

(101)

老

(1011)

額の禿を隠さんと
髪引きのばし、物問へば、
さぞと定かに言ひかねて、
耻づる色なく目を逸らす
『老』は坐りぬ。近く来て。

笛

笛、笛、笛、

そことなく笛鳴れり。
わが歌のみなもとの水、
若き男をみななのよろこび、
皆鳴れり。笛、笛、笛。

(1012)

階 段

(104)

『な蹠よ跟ろけそ、よろぼひそ。』

曲れる曲れる梯子はし段だん。

『いいえ、わたしは酔ひませぬ。』

曲れる曲れる梯子はし段だん。

『やツとの思で上のほツたね。』

おとツさん

『おとツさん、おとツさん。』

喚んでみたれど耳が無い。

首くびも胴どうも無い。

ただ足ばかりよろよると

墓へ行く。うちのおとツさん。

(105)

落葉

(106)

鴉樹を下りて、飛ばず、
跳るごとく歩む。
そのあとに、ぬるでの葉、
銀杏の葉、橡の葉泣けり。
死なばや、死なばや、死なばや、と。

女

内側に歩けども轉ばず。
ああ、女。
男の如く銃を執らす。
黒髪、腫くちびる、
我等ああ勝目なし。
(107)

獨語

(108)

『まだ兒供だわね、』とぬかす。
ちよッ、馬鹿にしてらあ。
おいらは知ッてゐる。
おいらは知ッてゐる。
おいらは盲めくらの兒供だから知ッてゐる。

一語

(109)

髪にかざすは、ひとふさの
紅あかなる櫻。
いつの日か、
君に聞けるも身に染しみき。
ただにひと言こと。

手の花

松の葉ならず、櫛ならず。

その花たまへ。

とこわかにかに

命を浸す緑の香。

君が御手なる。

二人

とすれば歎く。悪縁の

ふたりを、二人。

さはれ、はた、

かたみに泣きぬ。君なくば

さびしからまし。

火

火中ほなかに生れ、火の子等は

くちづけ、少時しばし。

舞ひつれて

今ぞ天あめゆく。黄金きんの蝶、

しろがねの蝶。

乗合

女をみなの息いきす。背せのかたに。

知らぬ乗合のりあひ。

風出づと、

水夫かここそさわげ。この人を

われは護まもらん。

漫 步

春の夜の銀座通を
大股おほまたにわれは急ぎぬ。
新橋の十時の汽車に
待合はす人ある如く、
驅落かひおちの約ある如く。

兒

いとほし、いと哀かなし。
面ざしの我に似るこそ
運命の我に似るなれ。
いとほし、いと哀かなし。
末すゑの兒は、わが兒は。

鶯

ほう、ほう、ほう、りよ。

鶯は啼く。尺八しゃくはちの

やつれたる小暗せくらき夢に。

ほう、ほう、ほう、りよ。

鶯はかひだるく悲める。

問 答

『死なん』とありぬ。初より

憎むべきかな、君が文ぶみ。

われは答へてかく云はん。

『君の命は夙いのちく獲えき。』

そのなきがらを答打こたうちたん。』

君

婆羅門の鼻を殺ぐ。

婆羅門は泣かざりき。

この君は、この君は、

やはらかに肩とりて

抱けども、ひひと泣く。

死の島

死の島は時もなし。

音もなし。底しらぬ

大海はとろりと黒む。

渚なぎさには石の如くに

静かなる棺ひつぎかさなる。

雪

しらしらと雪ぞ積れる。
NIKOLAIの圓屋根の上に。
その下にわが家の窓。
その下に三越の
女工場の蓄音機鳴る。

店

酒と、酢と、赤味噌と、
それらの匂ひ。
又そことなき穂麥の香。
うつばりに燕は育ち
黄なる口三つ鳴ける。

大路

大路を行けば面白きかな。
今しがた印刷局の検査場に
裸となりて綱越えし
女工等もさあらぬけはひ、
さざめきぬ。黄昏の人の爲る如。

(1111)

黒き色

何時見ても我等こちよきは、
NIKOLAI 堂の圓屋根の黒き色。
内にして提香爐振る法師等は
こを知らじ。信なき者の仰ぎ見る
NIKOLAI 堂の圓屋根の黒き色。

(1111)

波

(1114)

『死だ、死だ、死だ、死だ。』

渚なぎさに泣なけるさざれ波。

『死だ、死だ、死だ、死だ。』

波やわれ、われや波、

白しろき渚なぎさを逃にげまどふ。

舞

美うくしき羽はづくろひ。

桃もも色いろ鸚いん哥ごの。

見みよ、若わかき舞ま臺たいの少せう女にょ、

くくれれななるるの舞まの衣ころもの裾すそととりりて、

脛はざ上あげぬ。明あき燭あのもと。

(1115)

晝

田舎の湯屋の細長き煙突、
暑き日に黒き煙ぞ真直なる。
その下に、花しろき枳殻の木立、
斥候の驅足の馬の爪音。
犬吠ゆ、犬吠ゆ。

ふるさと

夏としなりぬ。ふるさとの
加茂の河原を踏みてまし。
唐棣の莖のみじかくて
黄なる花さく月見草、
この夕風にかをるらん。

虚 空

かの虚空は大いなるかな。
われらを生み、物言はしめ、
婚媾せしめ、戦はしめ、
泣かしめ、疑はしめ、
その擧句、見殺しにする。

(二二八)

ひと夜

帯を解く時君云ひぬ、
『この細れるを見たまへ』と。
朝の別れに君云ひぬ、
『忘れたまふな。海ごしに
二十日の月の黄ばめるを。』

(二二九)

砂丘

筑紫の海にさしいでし
砂丘の上を風が吹く。
あはれ、哀しや、旅の身は。
しらしら立てる砂ぼこり。
砂丘の上を風が吹く。

(1110)

静観

われ亡ぶとも、沈むとも、
かの人言に耳假さじ。
おもしろきかな。生滅の
相のなかに起き臥して、
よしあしも無く振舞ふは。

(1111)

しもべ

(1111)

負けじ魂たましひなんぢ汝こそ

若かりし日の下部しもべなれ。

人皆のする悪しきこと、

又、かりそめの善きことも、

我に教へし下部しもべなれ。

われ

もののゆかしく、妬ねたましく、

時におのれを高しとし、

又卑いやしとし、あこがれて

分別ぶんべつ知らぬ我なれば、

うべ、商人あきびとは嫌きらふらん。

(1111)

某

七^{なな}歳^つにて大^{おほ}寺^{てら}の
賽^{さい}錢^{せん}箱^{ばこ}に火^ひを放^{はな}ち、
十^と歳^をにして犬^{いぬ}を斬^きり、
十^{じゅう}五^ごの秋^{あき}の踊^{おど}りから
村^{むら}の娘^{むすめ}に嫌^{きら}はれき。

(134)

森

森^{もり}の木^き立^たのよき薰^{かほ}り、
櫻^{うす}樟^{さう}の樹^き、樅^{もみ}、榲^{かし}、
蟬^{せみ}の啼^なく日^ひは面白^{おもしろ}く、
蟬^{せみ}啼^なかぬ日^ひはさびしさに、
蔭^{かげ}にもたれて物^{もの}思^{おも}ふ。

(135)

ばん、ばん

(136)

ばん、ばんと悪き賣聲。

ろしやばん賣の悲しさよ、

妻子ある身の悲しさよ。

暑き日中の裏町を

ばん、ばんと喚んで行く。

平 凡

指さし示し、『かの子等の

群にまじれ』と誨へける。

家鴨の群にあらねども、

草の束ねにあらねども、

わが嫌ひなるかの群に。

(137)

戀しさに

君を思へば、三十路をば
七つ越したる我なれど、
かの善く語る若者を
仇敵あだかたきともなしつべし。
君を思へば、君を思へば。

(一三八)

路 上

逢はで歸りしかへるさの
わがさびしさも堪へがたし。
ふと曲りたる路の角、
崖がけの日かげに青みたる
釣鐘つりかね草くさもうらがなし。

(一三九)

ひと日

君が化粧の室まにありぬ。
水色みづいろぎぬを脱たぎ撓たぶめ、
圓肩まるかたかけて君が塗ぬる
白しろきかをりをわれ愛あでぬ。
若わかき二十はちの日の如ごとく。

(150)

思

思おもひな踊おどる日のあり、
手をつなぎ輪わの形かたちして。
思おもひなうらわかし、
まはだかの美しくしさ。
心こころのみひとり痛いためる。

(151)

たまり水

野^の分^{わけ}のあとのたまり水、
鏡のごとく底^{そこ}澄みぬ。
しづかに沈む櫛^かの實の
一つ二つもあはれなり。
青き木立^{こだち}の下かげに。

(一四二)

愁

などか、などか、わが愁^{うれひ}。
木彫^{きぼり}のごとく黙^{もだ}したる。
寡婦^{あづま}のごとく、病人^{やまうど}の
ごとく、静かに黙^{もだ}したる。
わが愁^{うれひ}、汝^{なれ}も老ゆらん。

(一四三)

鐘樓

たまさかに夕のぼりぬ、
大寺の鐘樓のうへに。
はろばろと稻の穂黄ばみ、
その中に、あはれ、一すぢ
國道の白きかなしき。

(144)

風の夜

蠟燭の火はまたたきぬ、
わが掩ふ片手のなかに。
野分の風のおもしろさ。
古りし書棚のいと嬉しげなる。
かかる夜にこそ寝ずて讀ままし。

(145)

わが兒

(一四六)

室扶斯を病めるわが太郎、

また夕方は四十度に熱こそ昇れ。

詭言ウツコトに CHANTER、CHANTER と

佛蘭西唱歌セウカのいと嬉しげなる。

あはれ、この兒を我等死なさじ。

力

美しくしく、清きはもとより、

またよし、それが汚キガれてありとも、

黒く、どろどろの物にても、

力満ちたる刹那ゼツナの

ああ、或物にてあれ。

(一四七)

獅子使

雄^をの獅子は眠りたる。
このひまに讀む、君が文^{をかみ}。
雄^をの獅子は寢返りぬ。
猶しばし讀む、君が文。
雄の獅子は吼え出でぬ。

(二四八)

目

灰色のまぶたのもとに、
死の島の月夜のごとく、
岩室^{いはむろ}の牢屋の如く、
腫^{はとみ}なき白膜^{はくまく}の目ぞ
青ざめてわれを見守る。

(二四九)

港

投げたる如き歌の節、
たそがれの棧橋に。
あはれ、いつの日、かの沖の
暗き方より君は來ん。
猩猩緋の服つけて。

(150)

池

暴風の後の池水に、
傷負ひし幹、飛び去りし
枝の裂目ぞ映りたる。
みなわが如し。ちり浮ぶ
赤きはなびら、青き果も。

(151)

門

五年ごねん越しご使つかひきたらず。
郵便物もとどかざり。
この門もんは鎖くわせるまま、
どくだみの茂るまま、
東京の真ま中なかに朽ちてゆく。

鵓

たそがれの青める空に
真白なる鵓うすの鳥啼く。
何なんとて啼くぞ。
若き日は歸らずと、
あはれ、わがために啼く。

自省

わが命いと粗きかな。
わが歌の未熟なるかな。
わが歎き、わがいきどほり、
わが涙、みな力なく、
みな舊く、みな濁りつつ。

(一五四)

夢

夢より歸れる男あり。
あはれ、その男、
息もたえだえ。
あたりにはLYREの琴、
向日葵の花、泥に塗れて。

(一五五)

機 杼

きり、はたり、
はたり、ちやう、ちやう。
いと粗し、わが織る麻は。
さはれ、また、聞けば涼しや、
杼の中に細き管鳴る。

(一五六)

はやしごと

しちめんだうな主の宿を
忘れてふたり囃しごと。
ひやる、ひやる、と囃しごと。
お氣に入らずはお主う様
お叱りなされ、と囃しごと。

(一五七)

その手に

『ああ、知りぬ、君がたぐひを。

海ゆけば沖の白鳥、

空ゆけば赤き旗雲。』

かく歎き、上目しければ、

われやがて下りき。その手に。

細緒

ましろなる細緒一すぢ、

勾玉に管玉つなぐ。

青なるも、紅きもつなぐ。

忘れかね、

はた、思出も。

寢 臺

(160)

石竹色の帳より、
温室の戸に倚るごとく、
君が寢臺をかいまみぬ。
この中にこそ朝寢する
わかき女の香はこもれ。

榊の葉

長詩四十二篇

森

駿河なる富士の麓の大裾野、
高原くれば、はろばろと目路は擴がり、
ここに今直立の木の大木の
杉のひとむら、眞黒にも神寂び立てり。

木の蔭は吹雪に、雨に、炎熱に、
旅ゆく人を憩はせて、千尋に延びぬ。

この森を要かなめとして、八岐やちまたに
路すぢの分れぬ。末廣すゑひろの扇あふぎのかたち。

わかみどり、野はらは春草はるくさの色いろ萌もえて、
霞あせめる空そらに揚あひ雲ひ雀はり優いに歌うたへり。
中なかをゆく路みちはおのおの面白おもしろし、
甲斐かいへ、武藏むさしへ、相摸さかみ路みちへ、都みやこの市いちへ。

ここに、今いま感かんずるは、いにしへの

菩提ぼだい樹じゆ下げなる正覺しやうかくの聖ひじりのこころ。
八岐やちまたの路みちの何なにれも行くによし、
わが行く方かたはやがて皆みなうら安やすの國くに。

まくは瓜

こは皮剥か、狂人か、
野に臥しありく物乞か、
業病もちか、博打か。
孟蘭盆まへのこの二日、
いとめづらしき旅人は、
田舎の街の青物の
市場の人をさわがせぬ。

海國に見る帆木綿の
黄ばみ垢じむ裕きて、
ひとすぢ巻ける繩の帯。
檜の木づくり、がんじやうの
だいはち車その上に、
昨日も今日もよこたはり、
市場の檐を立去らず。

徳利形なる下ぶくれ、
黒奴に似る土黒の
顔に光るは、細き目の
しろ目と出たる前の齒と。
いづこを過ぎて來れるや。
問へど素知らぬ側目して、
うまげに食ひぬ、まくは瓜。

筭

寒きかな。
誰が居間ならん。
角窓のがらすの外は、
寒の雨しとしと
鉛を鎔すしづくしぬ。
總身わななく。

いく年か
 火も焚かざらん。
 この居間よ、外に物なく、
 蝕みし圓き卓、
 上には置けり、青玉の
 筭ひとつ。

灰白の
 蜘蛛の絲ひきぬ。

破壁の隅より斜に、
 卓の上、筭へ、
 ひとすぢ引きぬ。亡靈の
 白髪しろがの如く。

われや誰そ。
 ここになど在る。
 まろうどか、主人か、さては、
 蜘蛛の絲のその蜘蛛の

しばらく人の我と化り、
ここに立てるか。

(170)

刻刻に
凍えは迫る。
わが足は鐵より重し。
立ちながら釘づけて
一歩もこの居間去らず
死ねとなるべし。

斷末魔、

身は早氷る。

生きぬるは心と目のみ。

この刹那、うるはしや、

卓の上なる青玉は

燃えて光りぬ。

(171)

彗星

かの虚空、過ぐるは誰ぞ。
しろがねの篋篋の音うかび、
疾風ふき、雲こそ明れ。
蓬として、見よ、九萬尺の
青き髪背になびけり。
ああ、はうき星、未曾有と

汝を讚す。命運の
外なる道を驅けめぐる
天上の才、不退の子、
千萬年に一たびの
秘密もたらす大使者よ。
常珍らなる黄金の
燭臺とりて高照し、
無始の世からの歎きゆる
泣き爛れたる雙の眸、

日月輪も、金牛も、
大熊星も見かへらず、
唯、あはれなる地球星
半死のさまを一瞥す。
行方はいづこ、ましぐらに
かなたへ、かなたへ。永劫に。

斧

とん、とん、はた、はた。おもしろし。
いづこそや、
ほのかなる
梭の音。
わかき樵夫は聞きほれて、
天城の山の柴原に
手斧おとしぬ。

とん、とん、はた、はた、はた。今はまた、
斧なくて
うらめしや、
梭おとの音。
わかき樵夫きりは、覓とめ倦あみ、
『主しゅに叱しられん、何とせん、
縊くり死しなんか。』

とん、とん、はた、はた。『疾はく來きよ』と
なつかしく
われを引く
梭おとの音。
わかき樵夫きりは泣なき濡ぬれて
小走こりくれば、淨蓮じやうれんの
瀧たきぞ鳴なりたる。
とん、とん、はた、はた。唯聞ただきこくは、

はれやかに
おもしろき

梭の音。

わかき樵夫は瀧壺へ、

夢みごこちのあこがれに、

さところぞ降れ。

とん、とん、はた、はた。瑠璃の宮、

白き裳の

姫が織る

梭の音。

わかき樵夫は高機の

五色の絲の上に見ぬ。

失せしわが斧。

傘

田町につづく溜池の
日かげくわと照る大通、
二つの肩に、まんまるな
濃き緋のいろと、水色の
傘二つ舞ふ。くるくると。

傘のなかにはひるがへる。

秋草染めし袖たもと。
稽古がへりの二人づれ、
口拍子とる、ちん、つつん。
傘二つ舞ふ。くるくると。

この時きたる。うしろより
輪に黄金塗れる馬車一つ。
中には三つの深張の
真白き傘ぞ静かなる。

傘二つ舞ふ。くるくると。

(一八二)

お酌しやくの傘はつと別れ、
馬車をば遣やりぬ。乗りたるは
静かに、貴あてに、しろき傘。
見送りもせず、兩側りやうがはに
傘二つ舞ふ。くるくると。

海の怪

青みて圓まるき大海おほうみは、虚空こくうを廻めぐる
廣大くわうだいの鋼はがねの車輪しゃりん。そが上に、
瑠璃るり紺こん色の調草しらべがは、暖潮だんかう流る。
今、赤く西天さいてんを焼く落日らくじつの
猛火もうくわの霧きりに、一群いっぐんの不敵ふてきの族うから、
故郷こきやうの大赤道だいせきだうを遠く出で、
目ざすは荒き北の海、まだ見ぬ境さかひ。

(一八三)

切闇の氷の原に子生まんと、
 水牛の角、馬の爪、鱔の大口、
 鷺鳥の目、海蛇の胴の怪物は、
 日夜に百里、暖潮の早瀬に浮び、
 入り亂れ、尾振り、抱き寄り、跳り立ち、
 いと猥なる振舞に濁聲揚げつ。
 巨濤の山湧きあがり、鈍の鯨も、
 海驢も、さはに甲斐なき魚族も、
 皆みぐるしき後手に慌めき逃る。

日は落ちて、漸に夜となり暗がれば、
 この未曾有の珍客の路の案内に、
 億千の夜光の蟲は燭を點す。
 前には黒し。わたつみの羅馬に似たる
 古都、千島の沖の TASKAROLA。

戀しくば

(一八六)

戀しくば、花を摘め、摘め。麝の香する八重の撫子、
黄ばみたるよき香の薔薇、杜若、野菊、雛罌粟、
あまりりす、黄金日向葵、西ぶりの夕顔の花。
君知るや。花の風情を知る人は戀をも知りぬ。
又知るや。「思出」の色、「昨」の香を、常新しく
春秋の花は齎す。それにこそ「我」は見べけれ。
戀しくば、ああ、又君よ、朗かに歌をうたへよ。

君知るや。わが歌卷の中にこそ、君と相見て、
とこしへに花にもまさり老い死なぬ「我」はある
なれ。

(一八七)

車

葛城山の西ふもと、
闇ぞうれしき。残りたる
昨日の雪の野あかりに、
いで、この夜半を逃れめと、
荷車ひとつをさな兒と、
書調度すこしを載せて、
年老いし下部は曳けり。

(二八八)

猫やなぎまばらに矮き
浪華への路は幾曲、
ふたり手を取り、後より
わかき夫婦は小走りぬ。
慣れし野ながら、この夜半の
雪あかりこそ身には染め。
しばし負債も、つれなかる
人の心も忘れ果つ。
ああ、この車、北國の

(二八九)

櫓そりにもあらばをかしからまし。

(一九〇)

花がちる

花がちる。

あれ、花が

愛宕あたごおろしにちるぞえな。

花もひら、ひら、

心もひら、ひら。

なんとせう。

さつと一いっしよに、舞扇まひあふぎ

(一九一)

あけて受けよぞ。ちる櫻。

さつと一しよに、

扇もひら、ひら、

花もひら、ひら、

(帯はそろへの緋の牡丹、

長き袂は藤の花。)

帯もひら、ひら、

袂もひら、ひら、

おもしろや。

おもしろと

見るもひと時。

やれ、哀し。

舞の扇の狭うして、

ちる花はかすかず。

花もひら、ひら、

心もひら、ひら。

袂で受けよか、
やれ、袂で。
長き袂もかぎりあり。

いや、いや、いや、いや、
ほんに思へば何が哀しき。
拍子ひょうしそろへて、大鼓おほつづみ、
小鼓こつづみ、いい、やあ、とうたらり。
やれ、往いの。花と舞いひつれて、

花の行方へ。春かせに。
花もひら、ひら、
扇もひら、ひら、
帯も、袂も、ひら、ひら、ひら、
おもしろや、
花に似る身の京の舞ま姫ひめ。

琴

(一九六)

うち見れば十三の絃、絃は皆
ひと色にして黄金の水脈とこそ見れ。
天の川とわたる雁のひとつらね
しら羽を交す白玉の琴柱なびけり。
春の日を薔薇のかをり、丁子の香、
衣にしめたる姫ありて来て琴弾けば、

うち對ひ、月の横櫛、星の珠、
挿簪にしたる姫ありてともに歌ひぬ。

歌はみな常世の國のしらべなり。
うすくれなるの夢の花罌粟の花降り、
しろがねの泉ながるる花園に、
羽ごろも翻す天人の戀のこころか。

わが琴のおもしろきかな。おのづから

(一九七)

まろうど達のめづらしきゆし手、清搔。
日もすがら身は聞き惚れて、琴のまへ、
琴爪はめしわが指を更に思はず。

(一九八)

樟の樹

わが村の樟の樹よ、幾世經にけん。
手つなぎて十たり人めぐり試せど。
大幹は七尺を猶も餘せり。
春ごとに新葉の青注繩はりて、
村人は忌忌しくも齋き祝ひぬ。
むかしより樟の名は七村ゆすり、
行きずりの旅人も讚へぬは無し。

(一九九)

立寄れば横五丈枝さし掩ひ、
 冬の日には風を避け、雪を遮り、
 夏の日には常涼の蔭とぞなれる。
 遠退きて河邊より仰げば、さやに
 (大人もまた斯くぞ、) 樹はすべて見ゆ。
 大幹は二またに末岐れして、
 力ある両手さし天にひろげぬ。
 樹の王者ゆうゆうと心足へば、
 両手さし何禱り何懺悔せん。

大樟のくつろげる心に觀れば、
 人の世ぞおもしろく妙に興ある。
 その初蔭にきて遊びし兒等よ、
 貝まはし、手毬つき、歌ひ遠りき。
 うらわかき戀慕人泣きて手とりき。
 驕りたる庄屋の子馬を打たせき。
 その子等も束の間に白髪かき垂れ、
 念佛して、はては皆おくつきの人。
 その子等の後の後いく世の孫ぞ、

蔭にきて歌うたひ又も遊べる。
 ああ、更に興あるは、四時の眺め。
 おぼろ夜は花の精あこがれ遊び、
 雪の日は白毛馬空を飛び交ふ。
 しまさき風三日吹きていづちへ行くや。
 にはか雨さと懸り虹に變りぬ。
 定めなく移りゆくさまにはあれど、
 おのづから亂れざる律こそはあれ。
 (智慧あさき短命の人等は知らじ。)

天地に何ものか之に洩れんや。
 樹の王者兩手あげ大空抱き、
 己が世の趣にひとり笑へり。
 谷あひのわが村は語る物なし、
 過ぐる人ただに見よ、大き樟の樹。

海の中道

(110四)

がぼん、がぼん、と大太鼓、
夜湧く汐のしら泡の
渦に浮びぬ。誰が打つや。
静かに一つ、また二つ。
がぼん、がぼん、と大太鼓、
北の海にも鳴り響く。

西の海にも鳴り響く。
中に横たふ。砂の丘。

闇に、若やぎ、力ある、
つと、雄たけびの聲わたる。
『我等が待ちし幸の宵、
淫れの宴はじまる』と。

あら、聞くほどに、百ばかり

(110五)

がぼん、がぼん、と大太鼓
數こそまさされ。ふた方の
海はにはかにさわだちぬ。

見よ、あらはなる肌しろく、
ほのかに赤む乳のいろ、
西の渚に上りくる
清き少女の幾むれを。

また、見よ、北の渚には、
勇魚の銛を右手につき、
髪みな濡れて海に引く
大男等ぞのぼりくる。

二つの群はいりまじり、
『おお愛男よ』『わが少女、』
雙手をかはし、うなじ巻き、
はた、頬をよせぬ。『おもしろ』と。

がぼん、がぼん、と大太鼓、
音たかまれば、砂の丘、
しらしらとして踊りゆく
海の女男の大族。

お 才

みごもりぬ。機屋のお才。
子が父をえもこそ分かね。
母父は言へと責め問ふ。
郷人は袖ひきわらふ。
父が名を分かすば、その子、
子ならぬか。お才は泣きぬ。
戀するは歌ふに似たり、

さな責めそ、歌のもとする。

(110)

殻

わが歌は新しき殻、

まろらかに古銭の形、

灰白み、早も冷し。

いましてがた、飢ゑて死なざる

常若の盲目の啞

わが魂は燃えつつ膝行り、

(111)

ものみな甘しくちづけ、
かをり合ふ中に目を開き、
と見かう見恍けて欠びぬ。
思ふことありきや、無しや、
そはとまれ。刹那のちから
わが魂はやがて伊隠る。

遺れるは新しき殻、
火は焼けぬ石綿の性、
まろらかに古銭の形。

真中には、静かに青み
うつぶせる守宮の姿、
蛇のうろこ、朱の斑ぞにほふ。

わが殻はかくて眠らめ。

永劫やうきやくの知られぬ深さ、
その底に石と化なりつつ。

(114)

君

この時に、
兜卒とらの空の星ひとつ
きらと目またたく。
一億年の後のちにして
そのひかり地にや到いたらん。

この時に、

(115)

わが抱く人はたわたと腕さしのぶ。
あな、夢なりき。劫の世に逢瀬なき君は人妻。

旅 寝

薄月は戸のすき洩りて障子ごし淡く射し入る。
めざめたるわがひと室には、くろがねの闇の流れに、水脈ほそく黄金、しろがね、青銅の幾すぢ引きぬ。
夜を守る執爐の童

爐に焚ける木犀かをり、
こほろぎは一緒の琴を
はかなげに弾きも鳴せり。
こは旅の假屋なれども、
われは猶この時聞きぬ。
あえかなる都の妻が
にほやかに寝たる息の香。

木かげ

榛の木と樺の木しげる
山裾の原の中ほど、
木立洩る夏の日かげは、
橄欖の青地のうへに
こがねいろ麒麟の斑押し、
車百合、沙参、山石落、
古わたりの更紗の模様

さながらにうるはしきかな。
いづこそぞや、水音涼し。

(1110)

ここよりぞ路は二すぢ、
左して越後へは越ゆ。
湯治びと、勸化の法師、
繭買や、蓄音機もつ
旅稼ぎ、石工、博勞、
おもしろき路づれなりや。

語らへば別れぞ惜しき。
猶しばしここに憩はん。
いづこそぞや、水音涼し。

(1111)

法樂の夜

そと寄りて
ゐかかゝるものか、
わが膝に。
あはれ、この君。
香油ぬる鬢の香と、
衣の香と、
さと打かゝる。

ゆくりなき
わが膝の君。
おもはゆく
知らぬときめき。
内陣の朱蠟燭
かがやかに
浄土のひかり。

法樂の
初夜の黒谷、
人なかに
我を見知れる
君や誰そ。うつぶして
ものいはず。
今、鐘鳴りぬ。
まばゆかる

(三三三)

舞姫すがた。
ものいはず、
我もえ問はず。
笛なりぬ。鏡鉞も。
春の靄
夜の谷しろし。
びん悪しと
つと、すり退けば、

(三三三)

またも、つと
ゐかかる君よ。
わが膝に袖こぼれ、
舞扇まひあふぎ
襟を出でたり。

目はあひぬ。
おもて染まりぬ。
火のごとき

われのはぢらひ。
目うつせば、いと大き
しろがねの
香爐ぞ煙けいぶる。

京なれぬ
この若き身を、
などか君
面おもて知るらん。

懺悔する人は皆
涙たれ
念佛上げたり。

天童の
らうたき群は。
華かざし、
手に華ちらし、
須彌壇の下練りぬ。

君とわれ
また目はあへり。

やはき手は
袂のしたに、
今つよく
わが手をとるぬ。
花ちらす天童は、
わが前を

三たび過ぎゆく。

(1110)

伏見の翁

物乞か、

病人か。

片岡に三とせ伏し

何か思へる。

菅原びとはただに喚ぶ。

伏見の翁。

(1111)

髪しろく、

冠かむりせず、

青あを枯がれし葵あふひの葉

二つ簪かざりせる。

こは古いにしへの貴人うまびとか。

伏見ふしみの翁おきな。

時ありて

額ぬかもたげ、

うるみ目に見守るは

ひんがしの方かた。

やがて目閉ぢぬ。直土ひたつちに。

伏見の翁。

とある朝、

うれしげに

口ゆがめ物言ひぬ。

『時なるかな』と。

やをら初めて起き上る。
伏見の翁。

よろよると
脊こごみて、
杖にすがりしが、
いづち往にけん、
また片岡に影も無し。
伏見の翁。

菅原の
大寺に、
婆羅門をとまなひて
行基きたる日、
路に迎へて掌を合す。
伏見の翁。

箱館屋

うつら、うつら、と戀の蜂、
ひやろ、ひやろ、と歌の蜂、
わかき蜂等はうなりつつ
峰の巢にこそ歸りくれ。

銀座どほりの蜂の箱、
柳の蔭の、ぎやまんの

五色の扉つと入れば、
右もひだりも蜜の倉。

倉にかをれるうまし蜜、
いづれかよきと、翅しろき
蜂のしもべは手をのべて
蠟の火かざす。壺の棚。

西班牙の野の茴香の

つよき滴したりはたとふべし。
刹那せつなを燃もやすみじか歌、
また、初戀のくちづけに。

また、たとふべし。南蠻なんばんの
罌粟りしの色する CURAÇAOキエラは
骨牌かるたを好む若者わかものの
長ながき上うへ衣ぎの緋ひの羅紗らさに。

わかき蜂等は羽鳴はななし、
琥珀こくろの、瑠璃るりの、しろがねの、
あまたの壺つぼに口よせぬ。
蜂のはち一つは早歌はやうたふ。

仁作

植木屋の仁作の爺、
常磐樹の木立の中に
足高の梯子さしかけ、
朝まだき日の出ぬ間より
露わけて鉄ちよきちよき。
幕のごと靄は動きぬ。

(1140)

白き地の頬かむりして、
まめをとこしやんと突ッ立ち、
赤皮に銀の金具の
煙草入。さて、および腰。
油蟬じじと早啼く。
日に焼けて皺寄る鼻も
老人の負けぬ氣の見ゆ。
静かなる染井の奥に

(1141)

蟬じじと、銕はさちよき、ちよき。

(1411)

黍

荒畑あらかたの朝霜あさしもに、ひとならび
残りたる黍きび。
實みは食はみ去はられ、
葉はは凋しれ、青あおく干ひ乾からび、
かさこそと風かぜにこそ鳴なれ。

山の穢え多た瘦やせ鴉がらす野の老たう狐か、

(1411)

里の小雀、

また来て啄まず、

蔭に寝ず。黍は興ざめ、

なかなかに歎く。かすかず。

(二四四)

誰かよく戦はん。執強に。

大きな威力に。

黍はこの時、

美しくしき白根の爪に

地を掘み、千々に悶へき。

(二四五)

そよかせ

(二四六)

そよかせよ、そよかせ。

ああ、わかき身の定まらぬ、

折にふれたる夢の片、

風の中なるあえかなる

清き、匂へる、ちさき蝶。

そよかせよ、そよかせ。

おどろき易き夢の魂、

百合の花よりつと立ちぬ。

うつぶす花の宵の露

汝の翅に重からん。

そよかせよ、そよかせ。

この草ふかきわが宿を

ひと夜の床と寝にこしか。

ああ、わかき身は寝ずもあれ、

(二四七)

まして短き夏の夜を。

(二四八)

そよかせよ、そよかせ。
いま、犬蓼の莖折れて
ひたれる池の水かがみ、
星のひかりに花の粉の
かをれる額やうつすらん。
そよかせよ、そよかせ。

青き手瓶に焦れ寄り、
そと蠟の火にくちふれぬ。
あはれ、たよわのその翅、
赤きほのほにわななきぬ。

(二四九)

病室

(1150)

鮎啼く。

ききと、ききと。

普請しさせる隣の室、
まだ板張らぬ縁の下、
風こそ煽れ。かんなくず。

白き寢臺に病人の
身はあやふくも寝返りぬ。
左の脇を下にして。

熱には慣るれ、長き夜を、
心たかぶる苦しさに、
ねむり薬を唯ねがふ。

電燈の火は冷やかに

(1151)

雪にも似たり。汗あせばめる
白き寢臺を埋めたる。

(二五二)

鼯いたち啼く。

ささと、ささと。

砂ぼこり

晝のひかりに浮きたちぬ。
河原の中の砂なかぼこり。
つりがね草つりがねぞ萎しなへたる。

臨終いまはにせまる行きだふれ、
河原に弱よわる乞食もは
青ざめし齒をくひしばる。

(二五三)

つりがね草ぞ萎へたる。
鑢にかけて鬪體
削る音するきりぎりす。

許 嫁

浮模様あるうすぎぬの
眞白き上衣、くれなるの
圓くみじかき上裳つけ、
緋の靴下の足垂れて
寢椅子に掛り、俯向くは、
十二になれる許嫁。
男は寄りて『いざ、ともに、

歌舞伎の時は近づく』と、
水浅葱なる紗のきぬに
束ねし髪のかかりばを
美しくしと見て促せど、
素知らぬ振に見もやらず、
硝子の皿にうづだかく
ぬれ色赤きさくらんぼ、
夫婦つがひのふくよかに
圓きを擇び、と見かう見、

耳環に掛けぬ。部屋の口、
青き帷を手に絞り、
髪にほやかに撓めたる
若き下僕は『いざ、たまへ。
おん馬車待つ』と畏まり
言へど、少女は答せず、
眼まみはりて雙さの手に
とるはかぼそき銀の管くだ。
管の上には美しくしき

黄金こがねの斑あまあるちよらう蜘蛛くま
二つ抱いだきて嚙かみ合ふを、
いとうれしげに見守りぬ。

(二五八)

ゆきあひ

ものゆかし。あはれ、由よし無なや。
そのぬしを誰たれとか知らん、
ゆきあひの深ふか幌ぼろぐるま。
衣きぬの香か、髪かみのほひか。
その車くるままがれる街まちを
ふりかへり涙なみだながれぬ。
かかること有りや。君きみにも。

(二五九)

蜂

丁子ちやうじの花と、連翹れんぎょうと、
日なたの軒に枝さしぬ。
下したには圓まるき蜂の箱。

事ことかあるらし。蜂の宮みや。
出いで入いる蜂を警いましめて
門かどに弦つる打うつ。衛士ゑしの蜂。

こがねづくりの宮の奥、
女王にやわらうは早はやも泣なきくづれ、
公卿くぎやうの蜂は羽鳴はななす。

つかはされたる夫いろせなる
近衛このゑ司つかさはつと歸かへり、
王座わうざに近ちかく奏そうすらく。

「日繼の姫は酒倉の
甕にうつりし己影に
見恍けて落ちて死なしけめ。」

「救はんとてか、殉じてか、
御供にありし小姓蜂
水漬きて並ぶ。甕の底。」

「いかで持て來ん、御遺骸、

透きて清げに見まつりぬ。

琥珀の酒の甕の底。」

宮の内外は同音に
よよとぞ哭ける。蜂の群。
上にはかをる。沈丁花。

淨き火

(二六四)

「何かは歎く女よ」と

佛のたまふ。

うらめづらしき貴人の

妻はおろおろ泣き繞る。

小き卒都婆。

「問ひたまふこそうれしけれ。

わが兒は死にき。

いかで二たび生きんすべ

教へたまへ」と、髪みだし、

掌合す女。

佛のたまふ。「いで、さらば、

墓に捧げよ。

おほかたの世に人いまだ

死なぬ家なる清淨の

(二六五)

ともしび一つ。』

(114)

女はやがて都路を

素足に走り、

戸毎に立ちて乞ひけるは、

『いかで賜はれ、死の穢なき

古きともしび。』

かくて七日目、たよたよと

疲れし女、

祇園の會座に身を投げて、

泣きて訴へぬ。大衆は

まなこ見はれり。

『ああ、昔より人死なぬ

家は侍らず。』

佛のたまふ。『今こそは

汝に教へめ。淨き火は

(115)

菩提のこころ。』

(二六八)

刹 那

「か」とばかり、あな、おそろしや。
噛むは誰そ。わが足裏を。
こころ冷え、總身粟立ち、
浮上り、前にのめりぬ。
ああ、思ふ。今わが行くは
高草野、秋風立ちて
しろき露たわわに置きぬ。

(二六九)

否あらし。目路はろばろと
 はて知らぬ真砂の原ぞ。
 蒸し暑き真夏の宵を
 砂かせに月は黄ばめり。
 ここ過ぎて、必定むかし、
 飢ゑて死に、病みて倒れし
 天文の博士、巡禮、
 遠攻の異國の騎士等、
 隊組める商人、乞食、

駝の背に藏經積みて
 遠く行く黄袈裟の法師、
 怨念は千とせの後も
 晒れ骨と残りて朽ちず、
 仰向に二枚齒見ゆる
 歪み口、深雨履も、
 車の輪、馬の蹄も、
 『か』とばかり、觸るる物皆
 今も猶嚙むや。おそろし。

ゆくりなく石につまづき、
またたく間かくは思ひぬ。
おぼろ夜の都の大路、
君と行くことも忘れて。

(1711)

望 樓

五歳なる隣の童、
石ひろひ、木片をあつめ、
高高に積み重ねては、
頬るるを手もて支へぬ。
「何すや」と脊撫でて問へば、
問ふ人を顧みもせず、
「望樓をば造る」と答へ、

(1712)

正顔まがほに猶も支さへぬ。
 おもしろき遊あそびなるかな。
 「望のぞ樓みとは何なにぞ」と云へば、
 物知らぬ大人おとなとばかり、
 振返り我を見守り、
 はたすこし少女の如く
 顔赤め、目を伏せながら、
 「望のぞ樓みには、そこに登りて
 星ほし様さまを拜まがむ」と答こたふ。

賢さとしき兒こいしくも云ひぬ。
 いで、ここに、ああ、如ごと來き智ちも、
 藝げい術じゆつも早く萌もせり。
 兒この親おやよ、兒この伯父おぢ伯母おはよ、
 汝等いましが望のぞ樓みは有りや。

源兵衛

(二七六)

わかきどち博打つ時は、
いちはやき汝が手だれかな。

村人と賭わざしては、
汝がちから牛を殺しぬ。

なにげなき汝が口笛も、

市人はめでさわぐらん。

罪とがの犯し知らねば、
大寺の佛をがます。

少女等ともいふ頬には、
汝が笑まひやはらに赤し。

源兵衛と父が名襲ぎて、

(二七七)

ひとりもの、今年十八。

(二七八)

大榎注繩ゆふ蔭に、
片びさし小きひとつ屋。

紅木綿煤びし旗に、
『酒あり』と軒に出しぬ。

或夕のきまぐれ

闇が、すうツと大きな口を開いた。
呑まれまいと硝子障子が慄へてる。
硝子の外で、ちらと、
青白い、若い女の骸骨が笑ッて消えた。

おれは今、阿母さんの青臭い胎を
二度出るのがかしら。——目をつぶれ。

(二七九)

背後から、
 書棚に掛けた黄いろい更紗の蔭から、
 又おきまりが遣ッて来る。
 天采博打と、そら吹けそら吹けの踊と、監獄の窓
 の看守の顔と、火葬の火と、
 いやに、ごツちやになツた気分。やけに、いらだた
 しい気分。

そして、石油のやうに滅入ツた、あくどい黄昏—
 おれは目を開いたまま、音の無い、目まぐるほし
 い夢を見てゐる。

やあ、血だらけの赤ん坊が駄駄を云ふ。
 あれ、あれ、二階の下、湯殿の板間に寝反ッて駄
 駄を云ふ。
 しかし、なせだらう、わツと喚く聲がしないね。

なんだ、赤ん坊ぢやないらしい。
誰れだ、誰れだらう。

駄駄を、駄駄を、駄駄を、静かに捏ねてる。

時計の針は午後六時をさすばかり、なんの音も
ない。

おれの細君も何とか云へばいいに、
どなりもしない、呟くこともしない。

ただ冷たい目で、じつと向うを見てゐる。

蛙

青田の中の病院の明放した硝子窓、
病室の電燈は水銀色に曇ッてる。

蛙が田で啼く。

「裸か、裸か、裸か」と啼く。
啼く、啼きやがる。

「裸か、裸か、裸か……」

『裸さ』と若い肺病患者は起き直り、
『ああ、裸だよ』と深い氣息を彼は吐く。

白い寢臺の上に今死ぬ、瘦せた徳田を一人坐ら

せ、

蛙が四方で啼く、啼く、夜ツびて啼く。——ちきし
やう。

『裸か、裸か、裸か………』

世の人よ

世の人よ。われらは齋く。
みづみづし青櫛の樹を。
また齋く。この天地の
うるはしき光と影を。
また、遠き御祖の血すぢ、
たましひの滅びぬ力。
また、齋く。うましくちづけ、

物皆のみとのまぐはひ。
これらをば讚へて證す
畫の曼陀羅、歌の伽陀をも。

すでに斯かれば、世の人よ。
われらが齋くもろもろに
歸依せよ。さては、黒髪の
かの生贄をたてまつれ。
いざ檜の葉を額に巻け。
われらと共にいざ踊れ。

刺の木

われはひとりを愛で癡れき。
貴に嬾やぐ青をみな、
わが歌。

捧げぬ。愛も、信樂も、
世の名聞も、福徳も。
汝に。

さてこそ思へ。褒美には
ただ一枝にて足りぬべし。
檜の葉。

さはせで、などか持て來るや。
このくさぐさの刺の木を。
冠に。

雨

濁りたる眞夏の雨の
みづけぶり市を掩へる。
誰か知る。全神経の
蟻の感熱れるままに、
身を投げて大地に浸り、
木臭き黒き憂の
琴を聴く。かかる樂しさ。

島原

今宵の客は唐津から
酒を積みきた船乗衆。
島を埋むる無花果の
木高き蔭の色町の
海を見わたすてすりに
ふんどし一つ、黒黒と
裸のそろひ。さかなには

鱧鮫の鉢、瓜の皿。

蒸して息づむ夕なぎに
海は風なし。たはれ女も
衣ぬぎ放ち、掩へるは
赤き一重のゆもじのみ。
だるく物憂き上目して
客衆の膝によりかかり、
はた肱をつき、腹ばひて、

覆盆子ならすしだらなさ。

ほろゑひきげん、船乗は
足座ならべて手をば拍ち、
さッさ歌へとみだらなる
歌のかずかず。藝者衆は
汗しづくして三味を弾く。
中に爺のこゑじまん、
しらがあたまに鉢巻し、

琉球へおじやれと琉球節。

下を通るは、かあち、かち、
辻占を賣る引板の音。
『鱒を殺すか、餌となるか、
様に逢はれよか、逢はれぬか。』
奴すがたに肩ぬげる
聲よき娘、ちりめんの
襦袢の袖の赤き色。

島原の夜はなまめきぬ。

路
づ
れ

わが路づれのみやび男は、
げにたわたわと少女をとめにも
似て身は萎しなへ、阿蘇の山、

五歩に一たび振返り、
半町ゆきて一やすみ、
『水はなきか』と息はづむ。

『無かとして御坐る』かく云ひて、
兎に似たる案内者は
芒のなかを先に行く。

つづく二人の早足は
『煙、煙』と打見あげ、
踏みこそ鳴せ。大靴を。

靴に觸れたる灰色の
石落も芒もはらはらと
あたりを濁し塵を撒く。

二時過ぎぬ。今見るは、
くわツと開きたる地の口に
硫黄をいぶす火の地獄。

渦巻くけぶりほうほうと

柱の如く立ちたれば、
日の色黄ばみ、空ふるふ。

『あゝ』とばかりに見驚き、
瓦斯を怖れて同勢は
みな鼻掩ひ、ものいはず。

時に、みやび男ただ一人、
正體も無く、坑口の

熱れる岩に眩つきて、

泣きつつ言ひぬ。苦しげに
『われ黄泉の界に青ざめて
都の君を猶戀ふ』と。

又、路づれのみやび男は、
驚くばかり、折折に
豕に似たる躰かく。

そをわれ聞きぬ。島原の
夜の十二時、海ばたの
橋の詰なる街の角、

奴島田に髪ゆへる
わかき女のはらからが
店を出せる理髪床、

島のならひに十二時は
いまだ宵時みやび男は
我を誘ひてつと入りぬ。

象牙細工の角時計
いま戸は開き、鳩出でて
くう、くう、と啼く。十二聲。

『お掛けまッせ』と出だしたる

二つの椅子に、箔光る
鏡を見つつ凭りかかる。

三〇一一

わがみやび男を知らざれば、
女はほつとその額に
西瓜食ひたる息を吹き、

接吻の香の残るとも
もとより知らず、やわやわと

抓みゆがめて頬をば剃る。

その妹はうしろより
赤き長柄の大團扇
とりて、そよると打あふぐ。

わがみやび男は快き
獣の世なるいにしへに
この時歸る大いびき。

三〇三三

讚頌

三〇四

白熱の殊勝の疼き、
いと深き刹那の爛れ、火の傷は、
闇きになびく秘の森、
朽葉の底の褐色の
沈黙の土を、ぬめらかに
こにやくの酒の膿散し、
焼きて薫せば、さと滴る火屑の胞子、

網がたに瑠璃色の琴柱おき、
八面にわしるしろがねの
菌の絃に、たよたよと
弾きこそ咽べ。神むすび、
あやに奇しき美織の
みとのまぐはひ。

(三〇五)

舊都の歌

西の都の時雨月、
鞍馬の山を根としたる
雲のなびきに、北の空
片曇して、古街は
花くちなしを搾りたる
淡き香油を撒く如き
狭霧の中に濡れそぼつ。

(三〇六)

格子づくりの家並の
狭き通りの小暗さは
朝のほどとも思ほえず。
五條寺町角店の
矮き檐端の大なる
赤き扇の看板に、
ほのかにあたる日の影は、
夕月夜にも見まがひぬ。

(三〇七)

わが小車は幾めぐり
小暗き街をよろほひて、
古き鏡の奥深く
臙にうつるまぼろしの
物影に似る中ゆけば、
仙洞御所の前通り、
木高き下に青白き
築土の名残つめたくも

室町の世の衰へを
正目に見ると身にしみぬ。

車とまりぬ。わが前を
今よこぎるは、白々と
大根を積める荷車を
眠げに曳ける黄の牛。
また傍には澄みわたる
御溝の水のせせらぎに、

黄なる銀杏ぞ流れたる。

(三二〇)

ふところそ思へ。歌、伎樂、
戀慕、名聞、ものまなび、
すべては夢の夢とても、
さめし心のやすらひに
わが歸るべき『寂靜』の
古郷にしも今著くと。

短歌

五十首

自らを嗤ふ歌

みづからをはかなむことを時にするかの定過
ぎし子等の如する

悲しきもうれしきもみな古山に水晶を採るこ
こちこそすれ

わが影の赤く亂みだれて踊りつる昨日の庭は白く
乾けり

うなだれしわが横顔に砂を打つ二月の風も浮
世なるかな

一人ある高きを求めわしりきぬ興おぼすることの
空しきを知り

わが上に黒き日はきぬ定まれる墓はかの如くに黒
き日はきぬ

あめつちを眺むることとも戀を得しことも人ひと並なら
さて何を泣く

わが泣くは少し異なるたとふれば物食ひ飽きし
ひと時の後

粉^こ煙^{たば}草^こをきせるにつめて思ふこと DANTE に隣
り盜^{たう}跖^{せき}につづく
わが兒啼く生れて二日^{ふた}その親を食はんとぞ啼
く殺さんと啼く
泣顔を隠さんとして病める兒の熱ある頬^ほをば
吸へるその父

病める兒は赤しいたましその母の寢足らぬ顔
は青し醜し
たはぶれに悪^{あく}者^{しや}の童^{わら}ひとすぢの繩を引きたる
わが行^ゆ手^てかな
この人の酒の後^{のち}こそあはれなれまた青ざめて
海を覗ける

赤き頬ほの少年われをうち覗のぞきははと笑へり古
 びたればか
 わが指の甘あまきを嘗なめてある時も身の卑ひくければ
 人に嗤わらはる
 袂たもとより煙草を出だし空を見てまた人並ひとなみに明日あす
 を思へる

かにかくに悲み白し三十路みそぢをば越えて早くも
 老おいにけらしな
 濃あき青あをの四月しづらの末の海に浮く水母くらげの如く愁しる白しろ
 かり
 きちがひと明日はなるべきわがこころ青く慄おそ
 へて VIOIONキオイオンを聴く

いたましき緑青色ろくしやういろのわがうれひ卯月の雨に似
る涙かな

秃筆びつをとる手端はな錢ぜにを數ふる手粉こな煙草たばこにしも染
みて黄なる手

あやしくも扁ひらたき石をならべたるこの横町よこまちに入
りて蹉つまく

この男ふかき心のありて無しふとせし事にた
め息をつく

あはれにも捨身すてみとなれる彼を見よ女の前に泳
ぐ真似する

くさぐさの歌

(三三〇)

紫と白と浅葱とやはらかき皐月の線にかきつ
ばた咲く
路次の奥酢倉の裏のくらがりに盲人の如く泣
ける三味線

燕なく皐月なかばの街道をみどりの髪かみの風は
しりきぬ

三階のなでしこ色の窓かけを少ししぼりて海
かせを嗅ぐ
ぬれ髪をかろく斜ななめにおさへたる磯いその日向ひなたの赤
きさし櫛

(三三二)

釣船のちひさき舵かぢにからみたる青菱あをひしの實みをのぞく

夕暮

二日ほど家をあくればさくら草さくさしをれて泣け
り妻つまのたぐひか

獅子ししに乗り煙草えんそうの殻からを投げつくる赤めりやす
の旅娘りよかな

窓かけの黄ざくら色の匍かふもとに腕かひなを越えて

寄りし唇

大橋おほしに語るふたりを見上げつつ笑ひて水夫かこは

帆つなの綱つなを引く

小床こどこには黄ざくら色のきぬ敷ぬきぬ春はるくれがた
の若わかき獨ひとり寝ね

夏くれば石を置きたる板屋根を晝も鼠の出て
はしる家
水ぎはの薄き月明三階の石づくりより霧のし
たたる
冷飯を法師のごとく清水もて洗ひて食ひぬ夏
の夕ぐれ

たよりなき心の如く風ふけば葦の若葉に流れ
よる泡

小蒸汽は大橋にきて笛を吹き折あはれなる夕
焼の色

鷗なす潜く御船は沈むとも造るすべありあた
らますら男

(以下六號潜航艇員の變死を悲みて)

大君も親もすべなし臣の子を海に沈めて見つ
つ殺せる

ますら男は最期の文をかなしくも小暗き海の
底にして書く

大君の船はあがりぬ大君の伴の武夫は死にて
あがりぬ

わたつみに貝の葉のごと命死ぬいくさを好む
ひんがしの人

老いたるは皆かしこかりこの國に身を殺す者
すべて若人

はて知らぬ悲みもまた月日あり君にわかれし
春めぐりきぬ

(以下山川登美子の一週忌に)

君なくて久しく倚らぬおばしまを黄なる小鳥
 の下り来て啄く
 君しのぶ心の上に花ちりてうすくれなるに悲
 しき四月

—— 榊之葉完結 ——

明治四十三年七月十六日印刷
 明治四十三年七月二十日發行

定價金四拾錢

詩集 榊の葉

著者 與謝野寛

發行者 大橋新太郎

印刷者 市川七作

奥附

印刷所 博文館印刷所

發行所

(東京市日本橋區本町三丁目)

博文館

振替貯金口座東京二四〇番
 販賣部電話本局二六二〇番

博文館發行
好評を博せる
文學書類

與謝野鐵幹君作

●うもれ木 (五版)
全一冊袖珍上製 紙數二百零八頁 正價金貳拾五錢
郵稅金四錢

本書收むる處短歌六編、長詩十三編、小説三編、美文二編、著者が奇抜の才到る處に可ならざるはなし。著者年少にして氣を負ひ逆境に處して志を立つ、本書は又側面より見たる著者半生の理想也閱歴也。

文學士 土井晚翠君著

●天地有情 (三十版)
全一冊袖珍上製 紙數二百三十頁 正價金貳拾五錢
郵稅金四錢

峨々の山洋々の水以て晚翠君の詩を評すべし此編君が今日迄の吟哦を録したるものにして新體詩中別に一旗幟を樹立するもの詞華爛漫誠に明治詩壇の新光輝たるに負かず請ふ愛讀を給へ。

河井醉著君著

●新體詩作法
全一冊判美本 紙數三百二十三頁 正價金參拾五錢
郵稅金六錢

文學士 大町桂月君著

●美文黃菊白菊 (三十版)
全一冊袖珍上製 紙數四百二頁 正價金貳拾五錢
郵稅金六錢

桂月先生の文は變貌を動かすこと久し悲慨の聲を發しては秋風の老松に慨するが如く哀痛の音を吐きては狐猿の幽淵に叫ぶが如く匂々血を吐き字々玉を綴る麗にして沈痛優にして豪宕是れを一讀すれば人の思を清くし感情を純潔ならしむ洵に是れ一代の才筆文壇の珍品たり。

鹽井、大町、武島三文學士合著 (三十一版)

●美文花紅葉
全一冊袖珍上製 紙數四百二十三頁 正價金參拾錢
郵稅金六錢

天に春花秋葉の文あり人間又美文辭なかるべけんや鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士の文名江湖に傳ふ今其錦心繡腸を吐いたるもの即ち此冊子となる世の花を憐み月を樂しむの士必ず本書なかるべからず。

佐々木信綱君、印東昌綱君合著 (五版)

●美文磯馴松
全一冊袖珍上製 紙數四百十二頁 正價金貳拾八錢
郵稅金六錢

文學士 鹽井雨江君著

●美文暗香疎影 (四版)
全一冊袖珍上製 紙數三百五十五頁 正價金貳拾五錢
郵稅金六錢

大和田建樹君著
 散文 月花 (二十三版)
 全一冊袖珍上製 紙數六百二十六頁 正價金參拾五錢 郵稅金六錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は優雅流滑奇想天外より來りて、句々風を生じ言々花を降らすものは大和田建樹先生の筆となす。此編收むるところ近作貳百編、蓋し落寞振はざる今日の文學界中の旗鼓たるものは此書を措きて他に又何かある。

大和田建樹君著
 美文 野菊 (三版)
 全一冊袖珍上製 紙數四百九十頁 正價金四拾五錢 郵稅金六錢

大和田先生の近作出づ。漫筆の清楚輕快なる紀行の畫趣詩味多き、歌編の嚙曉燦爛たる、特色集めて小冊子にあり、壺中の天地、眞に作文の模範たるべし。徒然の友たるべし。

大和田建樹君著
 散文 深山櫻 (九版)
 全一冊袖珍上製 紙數七百二頁 正價金四拾錢 郵稅金六錢

○初寢旅○初日影○短歌十二首○雪の降るさま○奉公の身○烟草○神樂乙女○春日山○三笠山○宮まうで○豊島岡○護國寺○今はなし○水の歌○雪の日○何もの光ぞ○合羽坂○短歌四首○出入の車夫○巻すし○納豆賣○三月三日○三枚庭○十とせの春○霞が浦○阿波の海○鳴戸の瀬戸○淡路島外數百項

佐々木信綱君著
 袖珍和歌文庫 定家歌集
 袖珍裝釘瀟洒 紙數二百二頁 正價金參拾五錢 郵稅金四錢

此書は新古今時代の代表者として一時期を劃せる定家の歌集より秀逸の作數百種を選定し添ふるに定家の傳記、その和歌及び歌學に就いての評論又年譜等を以てし巻頭には定家の肖像及び眞蹟を掲ぐ殊に本書は體裁高尚なるポケット形なれば旅行に携帯せんにも机上に置かんにも最も優美なる歌集なり

窪田空穂君著
 短歌作法
 全一冊判美本 紙數三百五頁 正價金參拾五錢 郵稅金六錢

東京朝日新聞評 開いて見ると内容は存外振つて居る初心の人には稍解し難いかも知れぬが獨り短歌のみ言はず苟くも韻文を作らうと思ふものも心得て置かねばならぬ事を切實に叙述してある一部の文學論と言つても差支あるまい

佐々木信綱君校註
 百人一首講義 (十七版)
 全一冊判美本 紙數三百頁 正價金貳拾錢 郵稅金六錢

同
 詠歌辭典 (六版)
 全一冊菊半裁判 紙數一三七六頁 正價金七拾五錢 郵稅金八錢

文學士 大町桂月君著
●關東の山水 (再版)
全一冊 判特製 紙數五百五十頁 正價金壹圓 小包金八錢

露を吸ひ霞を喰ひ飄々乎として行き悠々然として止まる高山の巔窮谷の底健脚到らぬ隈もなく靈筆縱橫關八州の名所細大漏らさず文章山水渾然一致し高士紙表に躍動し雲煙机邊を撩繞し人をして遺世超俗の思あらしむ洵にこれ大町桂月先生特得の文境加ふるに地圖あり數十葉の寫眞あり中村不折小杉未醒、丸山晚霞、高村眞夫諸先生の挿畫あり皆當代の逸品錦上花を添ふるの觀あらむ

大町桂月君著
●行云流水 (三版)
全一冊 袖珍上製 紙數三百十頁 正價金參拾錢 郵税金六錢

大町桂月先生の近業數十編を收む議論叙事抒情何くに行くとして可ならざるはなく高きを求めずして自ら高く街はず伴らず風骨稜々として氣韻生動す行云流水の趣は當代の文壇獨桂月先生の筆にのみ見るべし

同 君著
●一簑一笠
全一冊 袖珍上製 紙數三百七十六頁 正價金參拾錢 郵税金六錢

大橋乙羽君著
●補千山萬水 (廿三版)
全一冊 袖珍上製 紙數七百二頁 正價金五拾錢 小包金八錢

本書は辱くも九重の御覽を賜ふの榮を得發售以來既に二十數版を累刊するに至るの盛運に會す、總紙數七百頁、各地の名山大川、古蹟、勝景等優美なる寫眞版を挿入して、一々懇切に評述したれば實に一面完全なる旅行案内なると同時に婉麗なる大文章なり。

大橋乙羽君著
●續千山萬水 (十三版)
全一冊 袖珍上製 紙數六百五十頁 正價金五拾錢 小包金八錢

東洋古來第一の美本として、内外の喝采を博したる千山萬水は、其記する所の地東北に止まりしを、烟霞の癖は更に著者をして、東海畿内中國西南より北陸諸州を跋渉せしめぬ。是に於てか續編あり、之を初編に比するに、經る所廣きに從ふて寫眞に上れる絶景亦頗る多し。裝幀の美麗亦優るとも劣ることなし。

大橋乙羽君著
●耶馬溪 (五版)
全一冊 袖珍上製 紙數百五十六頁 正價金四拾錢 郵税金四錢

頼山陽をして耶馬の溪山天下に敵無しとまで絶叫せしめたる豊の耶馬溪、亦著者の周踏する所となり其の明譽の紀文と、靈妙の寫眞は本書となれり、從來斯勝を髣髴する者はい、獨り山陽の紀文ありしに、著者は山陽の未だ到らざりし所迄到り、其未だ寫さざりし奇勝を寫したれば、斯書を一讀する者遊意勃興好嚮導を得たるを謝せざる可からず

文學博士 姉崎正治君著

●花つみ日記

(三版) 全一冊判上製 紙數六百頁

正價金壹圓卅錢 小包料金八錢

南伊太利の美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇、その中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して、佛敎を語り、ロマの寺院に聖敎會の生命活動を視察し南歐に北歐にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ。天然美術の記録、宗教文明の評論として、江湖の一讀を薦む。

巖谷小波君著

●新洋行土産

(新版) 全二冊新形特製 表裝雅麗頗美本

正價各壹圓卅錢 小包料金八錢

先に伯林二年の觀察を、洋行土産二卷に著はして、爲に洛陽の紙價を貴からしめたる著者は此度渡米實業團に加つて在米三月間の見聞を、新洋行土産として發表す。著者が銳利なる眼光と輕妙なる筆致とは、世已に定評あり。而して彼の實業團の渡米や。又本邦空前の擧なりとす。本書他の外遊記に比して其光彩を異にせるもの元より論を俟たざるべし。

田村松魚君著

●北米世俗觀

全一冊判美本 紙數二百六十五頁

正價金參拾五錢 郵税金四錢

田村松魚君著

●北米の花

全一冊菊判特製 表裝華麗頗美本

正價金壹圓拾錢 小包料金八錢

著者は今の青年文士中一種の風骨を有す。年少氣銳、未見の山河と未知の社會を研究し、別に其作風を起さんとすの概あり。三十六年北米の野に遊び、爾來六年間の長星霜具さに米大陸の天地に放浪し、研鑽琢磨功を積んで後歸朝。今春東都の文壇に立つ、此書は即ち著者が新らしき生涯と新らしき趣味とを世に公にせる其第一聲なりとす、卷中收むる所の長短篇小説數種及び隨筆數項は皆北米の花の美と其艷麗を競ふ。

永井荷風君著

●あめりか物語

(三版) 全一冊判美本 紙數三百九十頁

正價金六拾五錢 郵税金六錢

讀賣新聞記者 松川木公君著

●樺太探檢記

全一冊菊判美本 紙數百八十二頁

正價金參拾八錢 郵税金六錢

是れ著者が返寒の樺太を踏破して其真相を描ける書なり書中寒山あり氷河あり高襟アイヌあり氷漬の木尹乃あり記事奇に富み文に興味多し狄地の秘密を知らんと欲する人は必ず此少壯の勇者が齎らせる一卷を求めざるべからず



文學士 樋口龍峽君著
●時代と文藝 全一冊 判美本 正價金四拾五錢
紙數三百五十六頁 郵稅金六錢

客歲自然主義の一世に驚々たりしとき著者が社會的見地に立ちてその椽大の筆を揮ひ縦横の評論を試みたるもの悉く蒐集して本書に在り著者の自序に言ふ「態度の眞摯と議論の穩健とは密に自ら期す」と自然主義の眞相と時代思潮の大觀とを知らんと欲するものは必ず本書を見ざるべからず

太陽記者 長谷川天溪君著
●自然主義 (三版) 全一冊 判美本 正價金五拾錢
紙數四百十六頁 郵稅金六錢

大阪毎日新聞評 本書は著者が最近二三年間に亘りて雜誌太陽誌上に掲載せる文藝評論文「幻滅時代の藝術」外二十四篇を收めて一冊となせる者自然主義と表現せるは書中右に關する議論の多きを占むる故ならん我文壇最近の趨勢を知得するに足る書なり

同 君著
●文學訓 (三版) 全一冊 袖珍美本 正價金參拾錢
紙數三百五十五頁 郵稅金四錢

文學の眞意義を定め、清新の文章を作らんと欲する諸子試に本書を續け、似而文學の雲霧を拂ひ如何にせば眞正なる文學の光彩を發揮し得べきかを簡潔明瞭に説述す。これ純文學の説明也。文學者の心理的解剖也。而して文學鑑評の標準也。

文學士 片山孤村君著
●最近獨逸文學の研究 全一冊 菊判美本 正價金壹圓
紙數五百五十五頁 小包料八錢

本書は著者が最近數年間に發表せし論文翻譯を纂輯せるものにして題して「獨逸文學の研究」と言ふは最近獨逸文學に關する者過半を占むるを以てなり

文學士 鹽釜天颯君著
●ゲーテの詩研究 (新版) 全一冊 判美本 正價金四拾錢
紙數三百八十八頁 郵稅金六錢

ゲーテは沙翁と共に世界の文壇に於ける將星なり而かも詩聖としてのゲテ以外人間としてのゲテを知らずんば未だ彼が人格の全豹を窺ふ者と謂ふべからず而して彼が全人格を最も善く傳ふるものは詩とフロウストとなり本書はゲーテが詩に現れたる思想感情を釋れて彼が偽らざる人間性を曝露すると共に技巧風格を窺ひて横溢せる詩美を鐘愛せんとすゲテ靈肉兩界の眞面目を知らんとせば此書を措きて亦他に求むる所無かるべきなり

文學士 大町桂月君著
●大絃小絃 (六版) 全一冊 袖珍上製 正價金參拾錢
紙數四百二十頁 郵稅金六錢

大絃急雨の如く小絃私語の如しとは、琵琶の聲のみならんや。桂月先生の此書才氣潑瀾筆力縱橫、以て普通文の模範とすべく、以て作文の指南とすべし

田山花袋君著
●近作十五篇 (新版)
全一冊 判上製 紙數
正價金七拾五錢
小包料金八錢

内容 ○拳銃○庖丁○父の墓○二階の間○寫眞○一家の主人○竹馬の友○毘○死○町より山へ○丘の家○二人づれ○騎兵士官○鍾○幼兒

島崎藤村君著
●小藤村集 (再版)
全一冊 判上製 紙數四百八十六頁 郵税金八錢

内容 ○黄昏○並木○壁○收穫○一夜○伯爵夫人○苦しき人々○旅○群○青年○死○弟子○土産○雜貨店○奉公人○河岸の家○芽生

吉江孤雁君譯
●短篇ツルゲーネフ集 (新版)
全一冊 判美本 紙數三百五十頁 正價金四拾八錢 郵税金六錢

相馬御風君譯
●短篇ゴリキ集 (新版)
全一冊 判美本 紙數三百十頁 正價金四拾五錢 郵税金六錢



3